

ニッポンを再び**元気**にする 8つのカギ

これが「もう1つの福祉」だった

木原 孝久（住民流福祉総合研究所）

「もう1つの福祉」センターを立ち上げよう

ニッポンを元気にするカギを探ってきたが、8つに絞られそうだ。これがじつは「もう1つの福祉」。福祉の本拠をこちらに移行させるか？ 誰が担当するか？ 本冊子は各課の当面の取り組み課題。

統合課 何でも分別したがるニッポン人。「あれかこれか」から「あれもこれも」主義に転換しよう。

ひらく課 閉鎖的で、閉じこもり癖のニッポン人。誰をも受け入れ、どんな働きも断らない開かれた組織にすることで、社会の役に立ち、身内も救える。

共生課 利害が相反する者同士でもなんとか折り合って共に生きていく一究極の課題。

参加課 プロの高い壁が崩れていく。と共にビジネスは「安心して暮らせる地域活動」に変わる。

個づくり課 ぐるみで扱われていたのが個人として認められるように。代わりに自己責任がのしかかる。

周縁課 一極集中がニッポン人の業病。放置された部分に光が当たる。まぶしすぎて困る人も…

フェアネス課 弱者を特別に優遇するーこれが日本人にはできない。大相撲を重量別にできるか？

スロー課 元々文明社会はスローが大嫌い。しかし認知症になれば、大助かりだ。

(1)統合

- 文明化を目指してひたすら「分化」を進めてきた世界は、一転「統合」へ向けて歩み出したように見える。
- 大谷選手が二刀流にこだわるのもこの流れと関係なくはない？
- 世代の統合。「エイジレス」。単に世代間の交流でなく“合流”してしまおうとも。老人クラブが50代を幹部または支援者として受け入れる動きが出てきた。
- 世代だけでなく「性」の統合も。女性と男性がファッションから家事、仕事にまで“相互乗り入れ”を試みている。
- 「コラボレーション」は、統合の時代を象徴するキーワード。
- 役割の統合とは担い手と受け手を分別せず一体化するような動きを指す。消費者が生産者とストレートに結びつく、あるいは自身、生産者にもなるという、「プロシューマー」が主婦の間で広がっている。犯罪の加害者と被害者が直接出会い、交流し、和解への道を模索し始めた。
- NPOが社会貢献に介入するようになって、企業活動とNPO活動がファジーになった部分が出てきている。

以上、「統合」化することで、あらゆる分野に福祉的効果が生まれている。

[子どもにも大人並みの権利を！]

■「統合」の項目で、目立つ動きの1つが「子どもにも」である。大人と子どもを区別するのでなく、同等の存在と認めようという動きが、なぜか最近、特に目立っているのだ。

■「子ども」も大人並みの人間として遇しよう—むしろ「権利」だけを認めるのでなく、それだけ早く「自立」させようということで、様々な自立訓練が試みられるようになっている。

■子どもにも「(ガンの)告知」をしよう、「インフォームドコンセント」を認めよう、政治教育もしなければならない、「住民投票」の権利も与えよう、ガーデニングの技術も教えよう—など。

(2) ひらく

- 「ひらく」というキーワードでくくられる、時代のトレンドも、それ自体、福祉性を持っている。
- 「入れてあげる」「切らない」も、このために救われる人が数多くいるはず。社会問題は、特定の集団を追われて（辞めたり卒業したりして）、その後、次の集団に入れず孤立した人から生じる場合が少なくない。
- また、家や企業、公共機関がそれぞれ「ひらく」ことで生まれる効果も小さくない。地域の福祉問題は「閉じた家」から生じると言ってもいいぐらいだ。家は、「福祉」を実現する場だという考え方も生まれてきている。一方、要介護者を介護する家族が周辺から福祉資源を受け入れ、事実上の福祉施設になるというケースも生まれている。
- 高齢化社会において、ベビーシッター協会が高齢者のお世話にも対応したり、登山協会がシニア登山への支援もするなど、こういう「やるべき所がやるべきことを」することで生まれる福祉資源は、ほぼ無尽蔵と言っていいぐらいである。
- 「閉じた組織・機関」は結局、その内部にいる人の人間性を踏みにじる状況が生まれてこざるを得ない。「内部告発」を推奨し、告発者を保護するようになったことは、この点で画期的な試みとすることができる。

■最近始まった、認知症の人などが、自分の症状を社会に公開して必要な支援を求め、顔を現すようになったことも、福祉の進展に大きく貢献するはずである。以前は「家族の会」だけだったのが、「**本人の会**」が表に出るようになった。家族と本人は利害が相反する面もある。いよいよ「**ホンネの福祉**」が始まる。

[社会がつながりの糸を切らない]

■よく考えてみれば、「切らない」にもいろいろなあり方があるものだ。①完全に「切らない」から始まって、②「一部だけ関係を残す」(退職するが組合員の立場だけは残すとか)、③「一回切るが、ヨリを戻す」(退職社員が特定の任務で復職)、④「(切るけれども)援助は続ける」(老人大学が、一旦卒業させるが学習の支援を継続する)、⑤「(切ってはあがるが)戻れる場を用意する」(養護施設の児童が一旦退園しても、いつでも帰ってこられる部屋を用意)、⑥「他の組織に受け入れる」(趣味グループが退会者を他のグループに紹介)、⑦「切らないで役割を与える」(家族の会を退会した人を、介護相談員などで活用)など、実情に応じてこれらを使いこなしていけばいい。

[家は社会施設]

■自宅で出産する、自宅を学校にする(**ホームスクール**)、自宅で治療行為をする、ホスピスや最期の場にもするなど、社会的機能を持ち始めている。自宅を仕事場にする人も増えてきているし、自宅をデイサービスセンターや宅老所、託児所などの社会福祉施設にしている人たちもいる。こうやって「**在宅福祉**」は本物になっていく。

(3)共生

■「助け合い」とは、一方が助ける側になり、もう一方が助けられる側になる—ということではない。それぞれが、助けると助けられるの両方をいつでも実践できるのが絶対条件になる。「助けられ上手さん」が助け手を巧みに引き寄せている。

■加害者と被害者は直接対面させてはならないとされてきたが、被害者は加害者と会い、怒りをぶつけ、相手の謝罪を聞くまでは心から納得できないということもある。加害者もしかり。勇気ある被害者の間から、「対面」の試みが始まった。

■司法の分野で、「裁判にしない」で、両者の話し合いで問題を解決しようという、「修復的司法」の試みも広がっている。何事も法で処理し、裁判で決着をつけなければ収まらないような現代で、「共生」という側面からは注目すべき動きだ。

■利害が反する者同士が、ある形で「共生」の場を見出せるようになれば、これ自体「福祉」と言える。最近、子連れママが在宅勤務または在宅のまま仕事ができるように配慮する企業が増えている。

■小学校での乱射事件で子供を5人も殺されたアーミッシュの人たちが、自殺した加害者を「赦す」と言って、加害者の両親をコミュニティに受け入れた。息子を殺した青年を出所後に自宅の隣に住まわせている女性も。まさに究極の試練だ。

[対象者を担い手に]

■「共生」—「共に生きる」という言葉の真意—を今まで、日本人は誤解していたのではないか。強者が弱者を一方的に助けてあげてくれることを「共生」と言ってきたフシがある。企業も利益の（一方的な）社会還元を「共生」と言っている。しかし「共生」とは、担い手が時には受け手になる、受け手も時には担い手になる—互いが生かし生かされる—ことなのだ。

■しかし社会全体を見渡すと、本当の意味での「共生」がかなり広がってきた。いつもは教育や保護の対象者だった子どもが、他の子どものサポート役を引き受ける。いじめられっ子だった子が、その体験を生かして、今いじめに遭っている子の相談に乗る。病気や障害のある人が同じ病気や障害のある人の相談に乗る。

■ホームレスの人をヘルパーにする、選挙違反者をその防止講習会の講師にする、元空き巣犯を空き巣防止のアドバイザーの地位に据えるなど。こうすることで、問題を抱えた人が改善したり、犯罪者の再犯を防ぐことができるのだ。

[される体験]

■一度「体罰を受けてみる」体験をしないことには、体罰が生徒の心にもたらす負の効果を理解することはできない。そこで「体罰」を教師同士でやってみる、やられてみる体験をしたという。分かり合えない者同士が「される」体験を通して、「壁」を克服できないかと願っているのだ。

(4)参加

■今まで社会のあらゆる場で「プロ（専門家）」がその営みを独占していたのが、そこに「素人」（アマチュア）が参加できるようになった。プロとアマの壁がこれほど低くなった時代はないと言えるのではないか。

■「プロ」にはそれなりの「実力」があるのだと思われていたが、そうでないことが、様々な「事件」（「プロ失格」を思わせる）が起き始めるに及んで、ならばと「アマ」がそこに「実力」で挑み始めた。企業人が教師や校長に抜擢される、あるいはアウトサイダーとみなされていた塾の講師に、本物の教師が“指導”を受けなければならなくなった。

■とにかく「資格」さえ取得すれば、誰でも参入できるという動きもある。介護保険制度が導入されて、誰でも施設長になれる、事業所が開業できる。おかげで「福祉」の営みが、国民のすべてに開放され、「福祉」への親近感がグッと増した。

■企業の分野でも、ただの素人が「株」を買って、「個人投資家」の仲間入りをする風潮が生まれた。ネット上にたやすく「店」を開くこともできるようになった。自分の好きな商品をネット上で紹介することが、そのまま「営業」活動になるという、奇策も生まれた。

■一方で、消費者が直接、生産者と手を結んで「安全な食品」を手に入れようという、「企業」を抜きにした経済行為を考えついた（**プロシューマー**）。今まで商社などに搾取されていた開発途上国の生産者と手を結んで、安全な食品を作ってもらい代わりに、彼らが生活できる水準の価格を設定するという、これ自体、ほとんど「福祉」行為と言えるような「貿易」形態（**フェアトレード**）を考え出した。

■企業といえば、利益の追求を本来の目的とする存在だが、これを利益追求主義よりも、安心して暮らせる地域づくりのための「道具」として活用しようという、素人たちのユニークな「経済」行為も広がっている（**コミュニティ・ビジネス**）。

■NPO（非営利組織）の台頭は、社会の様々な分野に大きな影響を与えているが、このように「コミュニティ・ビジネス」や「プロシューマー」といった新しい経済行為—というより、社会行動—のあり方が、例えばへき地や農村地域の開発のための新しい「道具」として有効に生かされるようになりつつある。

■「参加」というキーワードによって、社会のあらゆる領域にできていた壁が取り払われるとともに、それぞれの分野の基本的性格をさえ変えているのだ。経済とは、人から収奪するための営みなのではなく、まさに人を救うための大事な営みなのだ。政治は一部の強者が自分たちの利益のために、また住民を従えるために存在するものではなく、住民が自らの共通利益を守り、また創り出していく営みなのだった。

■「裁判」といえば、住民からは最も遠い世界のことだったはずが、「**裁判員**」として参加せよとなった。

(5)個づくり

■「家族から個族へ」「夫婦別姓」というように、「家族」には、個人の自由な行動を阻んできた面もあり、「個の目覚め」はそれを打破する「武器」にもなっているのだ。

■「個」を大切にする—これまではただのスローガンに過ぎなかったのが、最近、これに実体が伴うようになった。企業分野では、今までは「コーポレート・アイデンティティ」=C Iが追求されてきたが、これからは「**パーソナル・アイデンティティ**」=P I、つまり社員1人1人のアイデンティティを求めているのだというふうに変わってきた。

社長と平社員が「さん」付けで呼び合う企業も出てきた。年俸制にして1人1人が会社と個人契約を交わすといった、個を前面に押し出した(社員と会社の)関係づくりも始まっている。

■**オーダーメイド**と言えは、ファッションの世界だけだったが、あらゆる分野でこのオーダーメイドが採用されるようになった。医療の世界でも、患者個人の遺伝子の部分まで踏み込んで、その人にピッタリの治療法を考えるというところまで来ているし、義手や義足も、失った手足の代わりではなく本人らしさを体現するものとしてデザイナーがつくり始めた。サービスマンを差し向けるのにも、1人1人に対してペアで張りつける「**寄り添い人**」制度が、いつの間にか広がっていた。

■個を大事にすることから、当然、当事者主義へ発展していく。1人1人が、自分が抱えた問題の当事者として、主体的にその問題への取り組み方を考え、支援者を発掘し、問題解決へ向けて行動を開始する。

■セルフヘルプグループが爆発的に誕生している。それも「家族の会」から「本人の会」づくりへと移行しているのが特徴的だ。また他人に精子を提供されて生まれた子が、自身の出自を知りたいと、父親を知る権利を求めて動き出した。

■「自己責任」という言葉が広く使われるようになった。生じた被害に対しては、被害者自身の自己責任で解決していく一厳しいあり方であるが、各自が問題が起きないように細心の注意を払っていくという感覚が生まれてくるのだろう。

〔「自前」の発想〕

■ここに来て日本人も、いろいろなことを「自前」でやろうと思い始めている。家を建てるなら、自分が納得できる家をつくりたいと、柱に使う木をわざわざ伐採現場まで出向いて選別し、コンペで建築家を指名する人まで現れた。

■自身の老後について、わが子と個人的な契約を結ぶケースも生まれている。ケアプランもケアマネジャーに委ねるのではなく、自分で作ってしまうという運動も広がっている。化粧品でさえ、出来合いの品を購入することで満足せず、自分で調合して「自分だけの化粧品」をつくる動きも。

(6)周縁へ 「中心から周縁へ」

■社会が成熟していくほど、中心だけに光を注ぐのではなく、社会のスミの方、周縁の方にも光を当てるようになる—という意味である。

■「地方主権」。今までは「一極集中」主義が幅を利かせていた。いまだに首都中心主義だ。それは事実だとしても、細部に目を向けると、様々な面で「地方主権」の動きは出ている。都市での生活に飽き足らない人たちが「Uターン・Iターン」を始めた。大企業が地方にオフィスを移転したり、地方の商店街の活性化や、「一村一品」運動など、地方を元気にする試みが間違いなく広がっている。

■「周縁」は、これだけではない。今まで「対処」にしか手をつけていなかったのが、「予防」にも目を向け始めた。問題が起こってから対処するのではなく、問題が起きないように措置を講じる—これもまた「周縁」の概念に入れていいのでは。

■表から裏、正から負へという視点もある。「死」への関心が深まっている。「自分の死をどう演出したらいいのか」を生前から考えて、自分に合った骨壺、死装束を作る運動なども生まれてきた。

■今までは犯罪を犯した本人だけが罰せられてきたが、犯罪を起こす遠因となった家族の問題（親の虐待など）にも目を向けるようになった。飲酒運転では、飲ませた店側や同乗者の責任を問う動きも。「かげの存在」にも光を当てようという

わけだ。

■「正から負」と言えば、企業の社会貢献は利益の社会還元、あるいは本業の腕を使っての地域貢献と見られてきたが、例えば人にぶつかっても死に到らしめない自動車や、そもそも交通事故を起こさない自動車をメーカーが開発するとしたら、これも社会貢献だと言えるのではないか。社会問題を起こさない商品・サービスを考える、社会問題を起こしても、それを正しく処理する—これを「**負の社会貢献**」と言ったらどうか。

表（おもて）だけに関心を持つのでなく、「裏」の方にも関心に向け、そこにある問題を解決していくことが、人間の福利にかなうはずなのだ。

(7)フェアネス

■「規制緩和」によって競争を促す一方で、ハンディを抱えていてもその「競争」に参加できる「公正な社会」をつくっていかねばならない。一旦、競争に負けても再チャレンジできる社会—は1つのあり方だが、その「チャレンジ」さえもできにくい層を、私たちは考えなければならない。もっと根本のところ、**「敗者を絶対的に下支えする」**仕組みを社会全体につくり出していかねばならないのだ。

■欧米ではそれを「フェアネス」と言っている。障害を持った人が、職を得て、人並みの収入を得るにはどういう措置が必要なのか。これまでは「作業所」で企業からもらった単純作業的な仕事をこなす程度で、収入は1人月給5千円～1万円といったところである。

元クロネコヤマト社長・小倉昌男さんが、自ら障害者を雇用してパン屋を開業したが、彼は障害者に「月給10万円」を保障した。なぜ、1万円と10万円という差ができてしまったのか。じつはそこに、フェアネスの発想が導入されたからなのだ。

彼は、あの有名なパンのブランド「アンデルセン」の社長を口説いて、そのパンを瞬間冷凍したものを提供してもらうことにした。出店の場は東京の一等地。ヤマトからも職員を派遣してもらった。店頭デザインも「アンデルセン」に依頼。店ではコーヒーの「エスプレッソ」も売るが、450円と安くはしない。障害者もあくまで「従業員」としての扱いを受け

た。

要するに、社会の高級資源を集中的に動員したのだ。ハンディのある人が、人並みの資源を与えられても、一般の人との差は縮まらない。それどころか、差は開く一方である。だから方法はただ1つ、人並み「以上」の資源を障害者にだけ独占的に振り向けることである。ゴルフで言えば「ハンディをつけて」あげるのである。これを日本社会が実践できるか。

■残念ながら、日本人はこの「ハンディをつける」のを好まない。相撲にも柔道にもハンディを全くつけなかった。小さい者は、ハンディなしで大きい者と闘え！—これが日本のスポーツ精神なのだ。その柔道が国際競技に昇格すると、階級制が導入された。とたんに日本人は興ざめしてしまった。

同じように、障害者は自力でその障害を乗り越えなさい—と日本人は言う。厳しい社会である。このフェアネス嫌いの日本人に、どうしたらこの精神を植えつけることができるのか。

■1つのヒントは、あのクロネコヤマトの小倉さんにある。欧米には「ノーブレス・オブリージュ」という精神があって、社会の勝者は、弱者に対してチャリティを実践する義務がある、といった意味である。社会の高位の者に課された社会的義務である。

(8)スロー

■「スロー」という言葉がよく使われる。「スローワーク」とか、「スローフード」とか。早いという意味の「ファースト」に対する言葉として、その反対の「ゆっくり」という意味で使われ始めたのだろうが、「スローフード」にしても、ただ「ゆっくり食べよう」というだけでなく、手間隙かけて自分で生産した食材で作って食べるとか、有機食品などこだわりの食材で調理して、といった意味も含まれる。

■たとえば、「脱アメニティ」。文明の利器なんかいらぬ、たとえ不便でも手作りで、落ち着いた生活を送っていこう。

『無駄のすすめ』—文明がとにかく「意味」を求めるのに対し、「それにどんな意味があるのか、どんな役に立つのか」を問わない。無駄なこと、意味のないことに敢えて取り組む。

「アンチ・グローバル」—今は何でもグローバルだ。こちらはその反対を目指そう。何でも世界共通であることがいいとは限らない。それぞれの国、それぞれの地域に独特の文化をこそ大事にしよう。

■自然への回帰—都会はもう人間が生きる場ではない。田舎へ帰ろう、農村で余生を送ろう。

『身体』の回復—文明の利器に取り囲まれ、それを身につけている間に、「身体」があることを忘れてしまった。身体が持っているはずの第六感を失ってしまった。それを取り戻そう。

■「アナログ」—すべてを「あれかこれか」で分別する時代。その間に「あいまい」な部分が無限に広がっているはずだ—その部分に光を当ててみよう。最近、MP3プレーヤーやCDの代わりに、昔のドーナツ盤のレコードがもてはやされるようになった。CDが取り除いてしまった雑音の部分に魅力があるのだと。

■所有から使用へ—文明の利器はいいが、それらを所有している間に、それらに取り巻かれ、かえって不便さを感じるようになった。もう「所有」はやめよう。使用価値があればいい。

■このように、人間が幸せをもたらすと信じてつくり上げてきた「文明」の副作用が目立つようになった現代、その反動として生まれた種々の動きに、明らかに「救済」への道筋が見える。

■福祉の面からは、こうした反文明の動きに、要援護者の本当の「救済」の素が隠されている。早い話が、認知症の人々にとって、何よりの福祉は、各種のサービスや施設ではなくて、「スローな社会」が生まれることではないか。スローな社会の実現はだから、福祉の究極の目標と言っても言い過ぎではない。私たちがそんな社会づくりに加担することが、手っ取り早い「福祉の実現」となり、「福祉の社会」づくりになるのだ。

